



朝日新聞

引き分けの美学



安藤嘉浩

夕べに考える 2014.6.18 夕刊

第63回全国七大学柔道優勝大会が14、15日、京都市武道センター(旧・武徳殿)で開催された。「七帝戦」と呼ばれる、旧7帝大による定期戦だ。

講道館柔道と違い、旧制高校・専門学校の大会で行われた寝技中心の「高専柔道」の流れをくむ。このルールだと、最初から寝技に引きこむことが許される。立った状態では簡単に投げられてしまうほど実力差があっても、寝技に持ち込めば相手を苦しめることもできる。

全国高校総体2位の実績を持つ体重120kgの選手に、80kgの白帯選手が4分粘った試合があった。相手主将と引き分けた初心者も。勝った選手が次の選手と順に対戦する「勝ち残り戦」だから、実力者との引き分けは勝ちに等しい。

講道館柔道は国際化が進み、テンポが良く、勝ち負けがはっきりするルールへと変化してきた。一方で、引き分けを目指し、亀のように体を丸め、チームのため能耐える選手の姿も美しいと感じた。

「引き分けの美学だよ」と東大OBが教えてくれた。柔道に限らず、現代の日本で忘れられがちな美学なのではないかと言ったら、言い過ぎだろうか。

(編集委員)